

中村俊定文庫
文庫 18
635





一夕浦子 齋去庵よりわきを語らひ
 四方八方の物より始序古人浦子
 世にさうさう今も三十三回忌
 星霜をわすれ給ふ清誓の道哉
 好みとれん其追福年いさう徳
 母子を繋ぐまの——子好子乃
 玉句を毛集むるかハおきまさら
 他善ハあるは——其趣向のひし



是不阿んやにまのらたせさ勢
のくくやあし師を崇と志き成
追ふ乃あ詠きくいと深せらちり
彼孝下跡跡子き劇場を
名家いまき羅りよ千及もい
風流のそ世千名高かきくを
思ひあきりし彼生涯のうち戯場ふ
名もあお役の今も人甲子あきり哉

拾ひ集め百篇れねん起き茶屋
茶子あまうせ人くは佳吟哉をい
一集とあさハ光相言倚詠の道劇
後佛周縁あ追うんと志をくみき
伽陀師の恩とあまよひをあ

天明八戌年
申去正月

七十七翁
石壽觀秀國

古人

納子

初年や柳の枝を冠根へ上げ
強んじり解多り樽の根へ迄
二明て啼くぬ雀れ着さけ

鳥丸光廣師の詠

言の葉れ跡れとく中言雄山夕日
つむりきちりきと気ハ酒ら高れ
詠とや素々畔の師其名乃

のらぬから我おひて

言れ善士の夕日よむよお善士

超波宗匠悼

い月日の過ぎゆく露乃木志ま
垣あれと野立寺布秋のくれ
吹溜る狐の穴志高素如
初め死やとて師連は

初巻二の先師三十三回忌年

あけり追慕の碑を出し

人に此銘りや一佳句哉とて傳

先の師より此字志恩也筆始を 納子

今もいふ書やむし此夕 處 連車

書のおふ首を物後より向う柳 龜音

水ぬらむ波の流中より向柳 宗太

去れ書や啼ぬ鳥の声 思し 仲長

あけり此書よちうき世を去り破き此
浪のりおろ書れよたうましくか
讀てもゆきを言物と賀き
とりや三十三回忌よりぬ

夢の世に初着りしを思ひし 喜砂

師初より居士のいふまき中にも
義輪の別荘を揮風雅に茶園
此夢の志よ此を我を弦んたり
解りし波の程とて

幸子菜の花も涙れ義輪如き 喜長



前九年 鐘競

享保三戌年

森田座

研 長石門

沢村宗十郎

生付の口上年古あきやう誠小川板子
 水心一を打射を云
 一あり水物り名もいせうと長十郎大坂と
 若石所花のお江戸と宗十郎と改刻せの
 初舞臺とせうふらうと誠家お美の

新く世中伊のらお

花をみち

文魚



雛鶴家督曾我

享保四年

市川宗十郎

首領十郎祐成

沢村宗十郎

同 五郎時宗

二代目 市川團十郎

初めの十郎目をかゝるくを五郎平
向ひく是時むといふせり 母
まことふ名人ありといふなり

時^宗む

子^宗を福寿草なり花の兄

香玉

咲とめえかゝる白ひ阿は梅も茶

杜光

咲やこの茶ハ雛波れ名よ高き

瓶舎



子寶今川状

享保五年

市村座

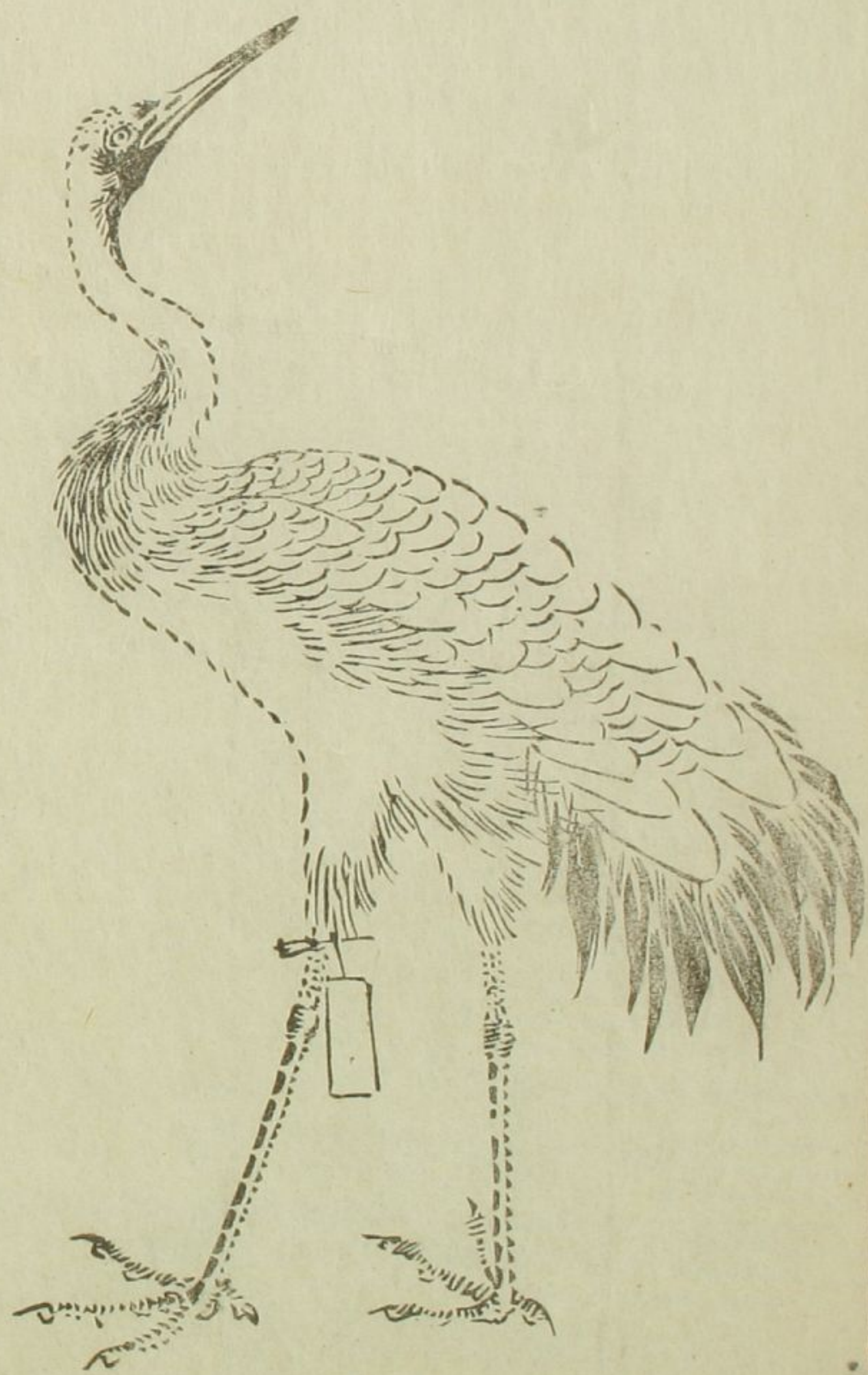
五三三
本名よりわ

沢村宗十郎

九條殿より何々の沙座あるやん
帖をいやくさせしり

月花よと上尺ぬ歌や五三三
あまや羽織をよき五三三
新しねるハ喜乃白ひう那

月成
不二齋
山彦



吉例今川状

享保七寅年

市村庵

源のよりかみ

沢村宗十郎

今川仲秋

市村弁之丞

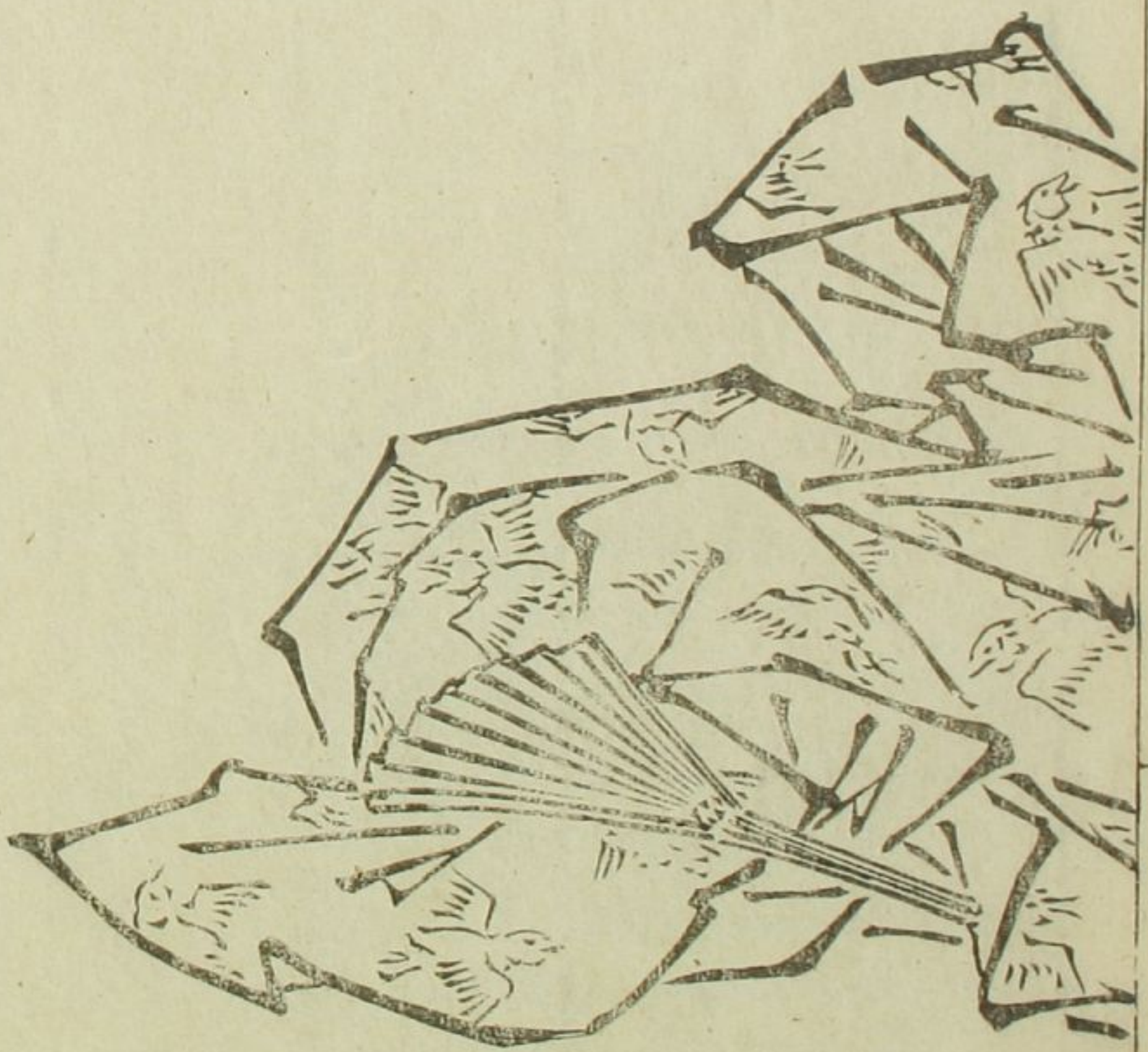
二人丹茶

おもしろくうら詞花集云 等思お人
 いつくをよきようくすれわらちきり
 かしはよきくろつらもか那

なぞくや中子あ六り 星々

むきさねのゆりや葛蒲杜若 盛巴

雲の中よ一人梅の操う那 女 解雪

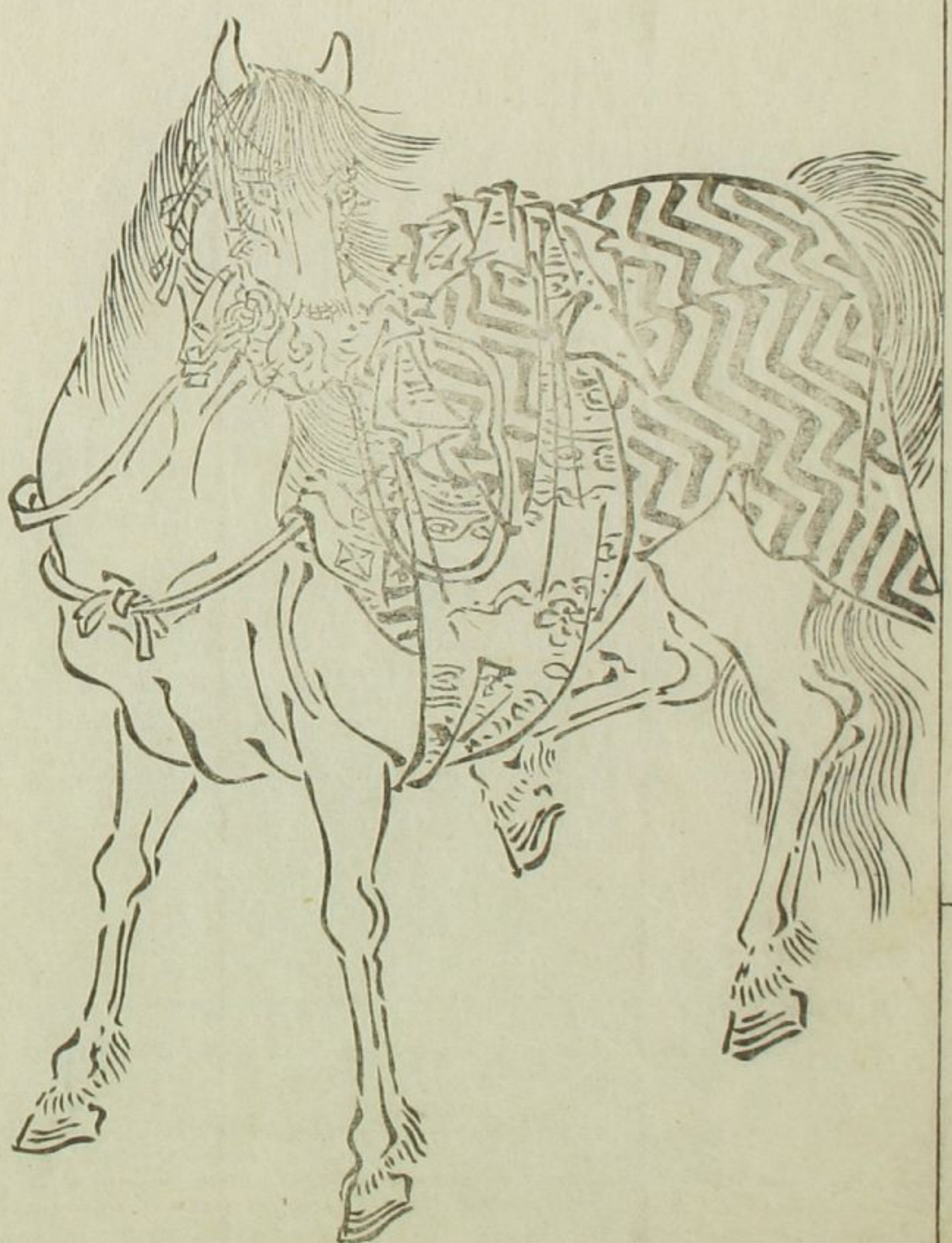


^{まろつる}
 鶴加増曾我 享保八年 市村庄

十郎まけちと 沢村宗十郎

祐成時宗を伴ひ母人へ勅當の形いろくせとも
 江とありし御免をくして敵討の紋をあらうさるゑ
 不詮才ハなきもいひ一刀子討く捨んと刀を抜
 ちあち既討んとせし不を老母の声もきり
 勅當先人と言ふ物語よ

大紋と浪の音阿り 百千と鳥 鶴主
 既中よとむり 葉とや花乃兄 蘭露
 正月の写哉合せし 紙舞斗目也 秋風



小栗長生殿

享保九辰年

中村序

小栗判官

沢村宗十郎

池の庄司

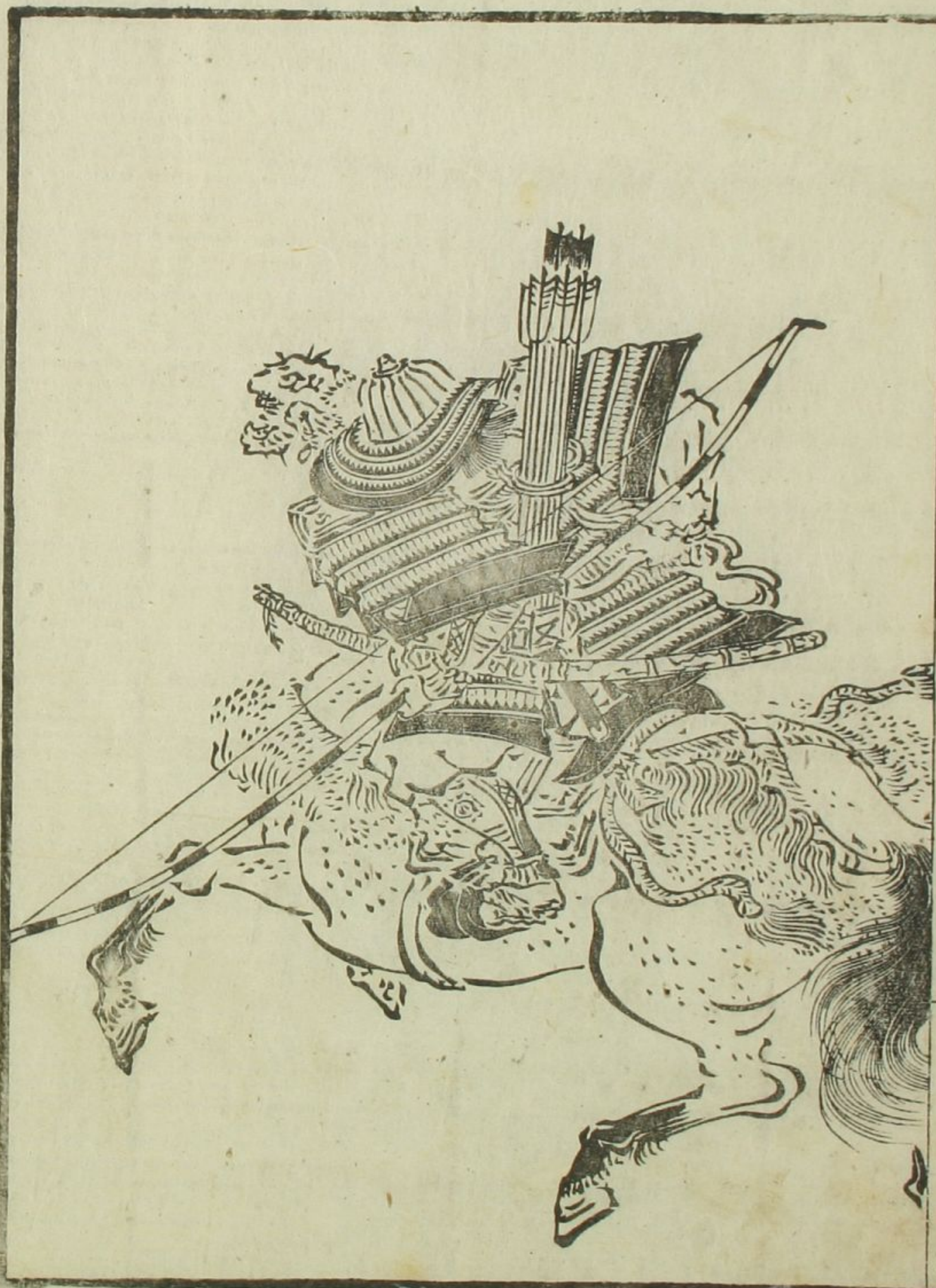
市川團十郎

後漢書に証のありしと辨務りしと陀阿上人
 世々もわたりてそくも又小栗判官ありしは
 十人のそれなり乃旧記証記を垂しき

銭鬼病の地車きし時雨うき 田平

曲系を巻し切き小散さく 萬成

かゝる不杉いりきき乃約 曲江



勘元世十二辰

享保十巳年

中村産

多海孫三郎 三ヶ町人 沢村宗十郎
多ヶヶひひ 元祖坂田半兵衛

孫三郎眼を系政子射之丸を海の新井整之
法正洗之洗ひ矢を引ぬけんまゐるを
障り以支より法正洗の魚皆片目とあり侍る

法正洗の餓へ残る古記う那 徳兵
揃きても盛よ出ぬ本等如太 幡風
町人乃傷さる走らぬ 赤砂



二人渡色
二人公時

門松四天王 享保十一年

中むら府

渡色綱

沢村宗十郎

坂田云時

松本幸四郎

三やぐ綱公時 雷神返

市川團十郎

酒吞童子

七も本も赤大石の国やん
りくく鬼れまみきん

綱

綱うし川葉うし 筋お甲う那

家橋

酒吞童子

紅白と袋しそ梅うひと本北

茂十

公時

公時のうしし出まうし年忘れ

薪水



首我蓬萊山

享保十二年

中村庄

親善の像を鑑みし中
 親進本名十所社成

沢村宗十郎

父母のゆゑも深き粉川古仏乃ちひたのきさかち

時宗園十所元祖園十所二十五圓忌

相云り五廻法くむる

先くす年れは向よりなりや六乃る系

女

文荷

馬ふりハシ川より系やむる千乃

暮潮

親善を鑑みし中云りいと柳

秀作



梅曆婚禮名護屋

享保十三申年

中村座

源より加祿

沢村宗十郎

本綿布子こを小原本此舞

小鞆のこを

黒本めせ免せくくろ本さをめせ

くくもくくとひひの免せく

春雨や晴雪くく玉本賣

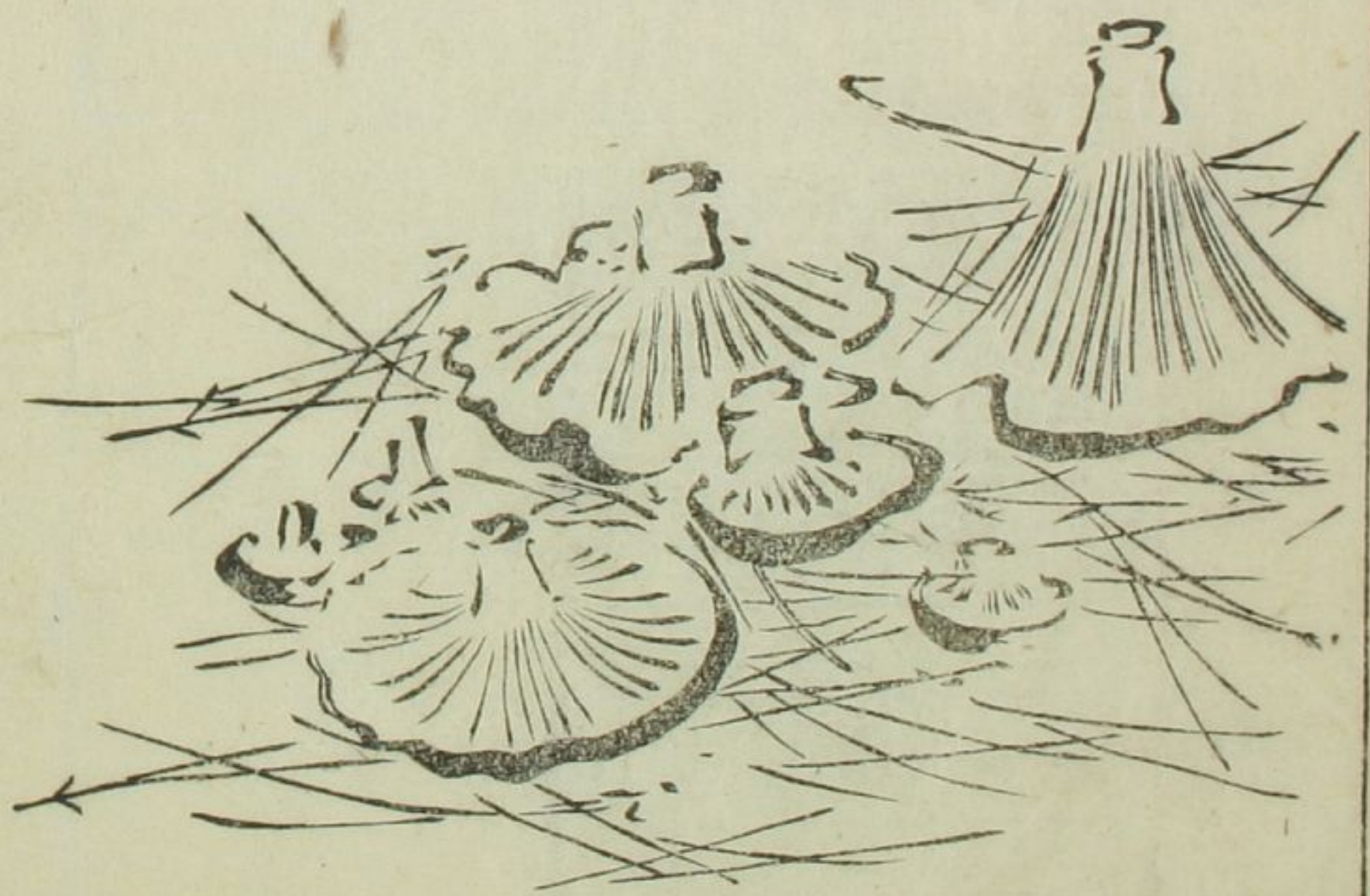
遊國

盃千様うさひや舞う袖

女
憐霞

本綿子も移書とひく様う那

東籬



入舟蛭小嶋

享保十四酉年

中村座

とくひさ

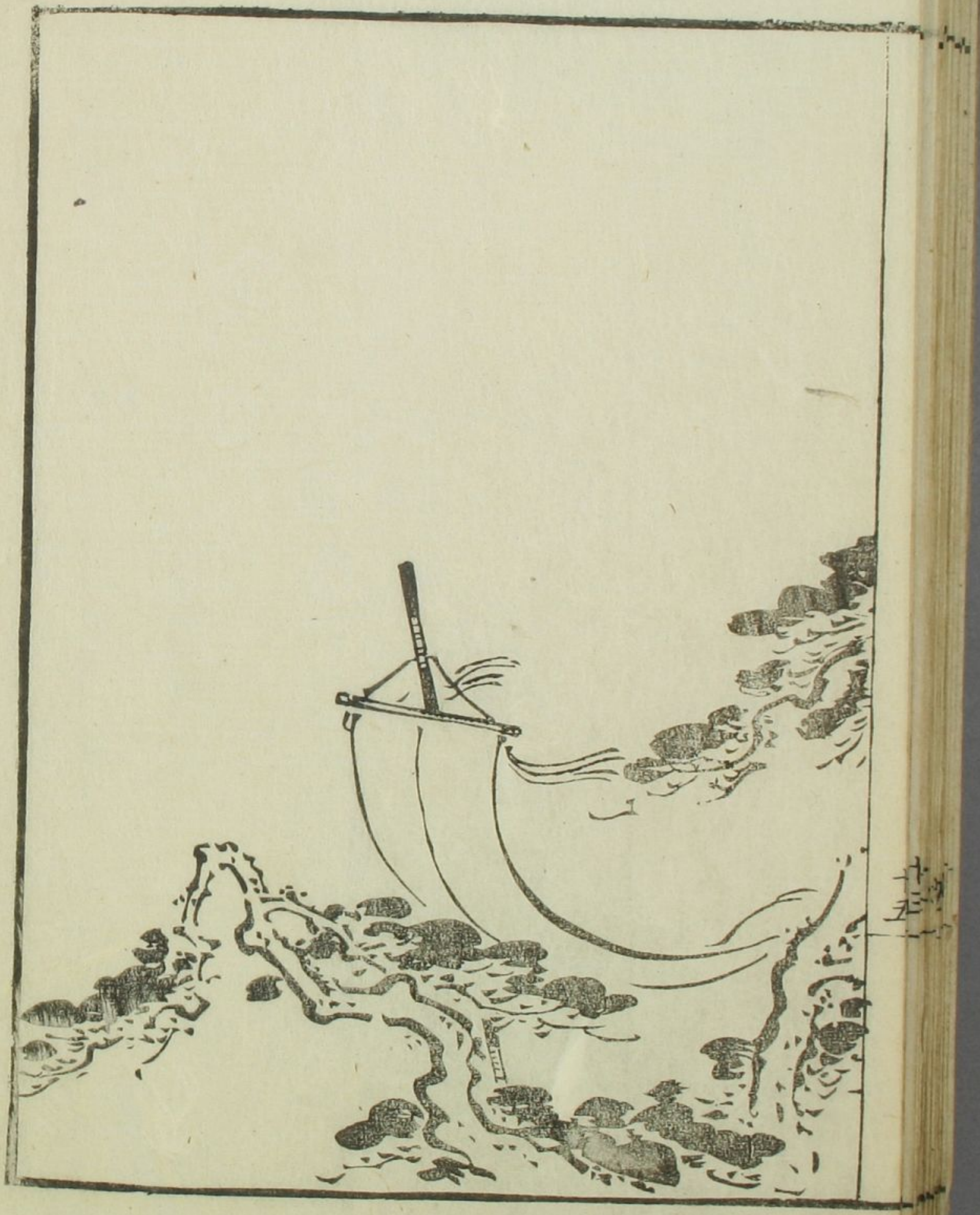
沢村宗十郎

一年小松殿小山と葺袴の遊語は
 伊呂島子かひくま馬盛久
 一曲ひとわちてのり園東まもり隠居

一奏さゆと

いの字此扇う那

菊翁



和合一字太平記

享保十五年

中村庵

市川園十郎市川園花和睦の
相立時園花紋下三條より乃
一文字をとるなり

あき男依氣 沢村宗十郎

男ありきり泣き辛子此花名と
酒汲え泣き嘉例と急い寸許
花毎子目も常よりぬ嵐う那

小知

保牛

連馬



大和言葉今川状

享保十六亥年

中村庵

源のより朝

沢村宗十郎

よりかひ

萩野伊三郎

本朝より古礼ありといへども足利家の玉初子
今川小笠原伊勢の三家より傳せて礼教を
傳せしむ

やうも朝へといふ名を以て

鳳林

指費小々朝白菊の末う水

江川



十七

柳葉旭源氏

享保十七子年

中村庵

小糸のやが之志のひれ女
本名氣の依よりとも

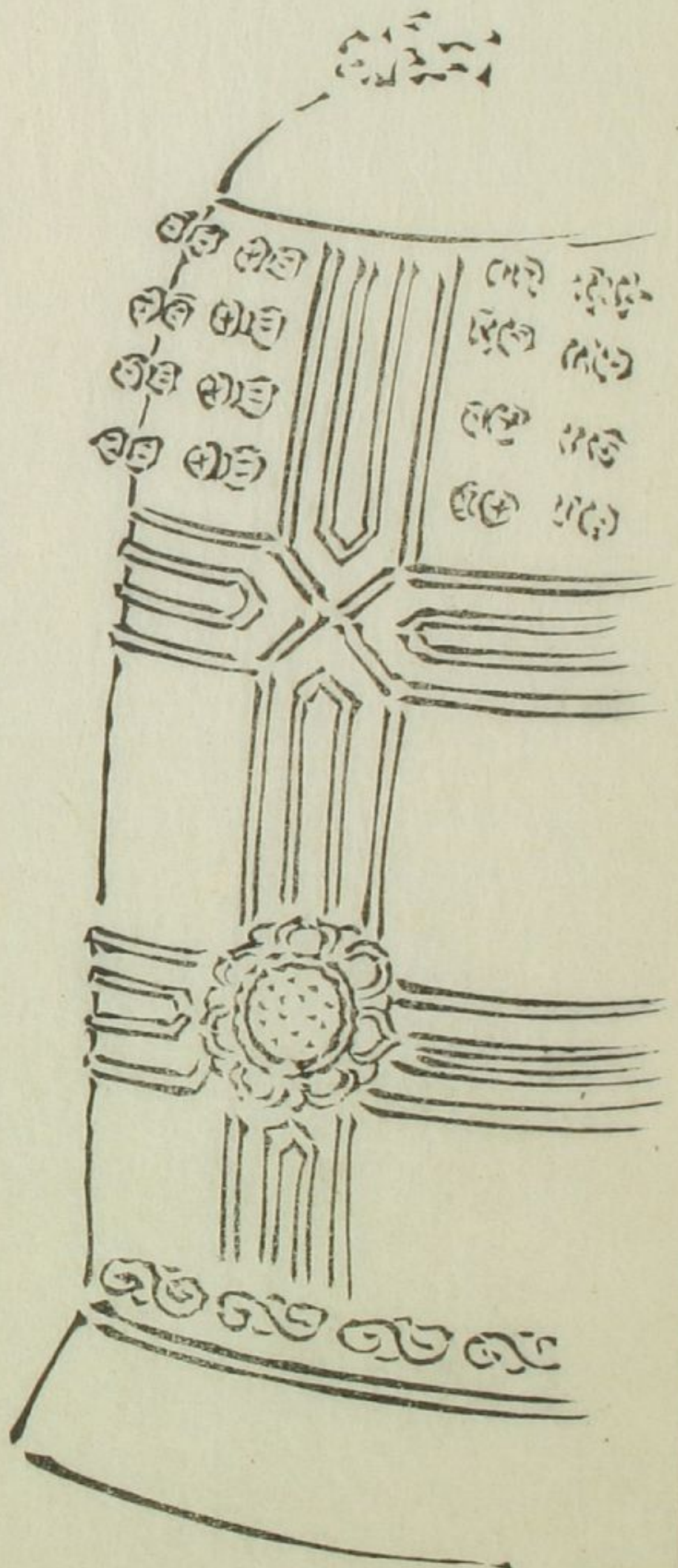
沢村宗十郎

去りともあまかもしるもよめれ名莊子外物屬
婦姑勃磳といふよ似たり唐夫人の姑よ
乳をすりや歌ひ誰もこゝれ福をすちり

誰くても女ありきりいし梅 屠龍

思ひかへし越えや柳のこゝれ梅 畔柳

をこゝかへし福をすれおこし 花籃



町人？み

享保十八七年

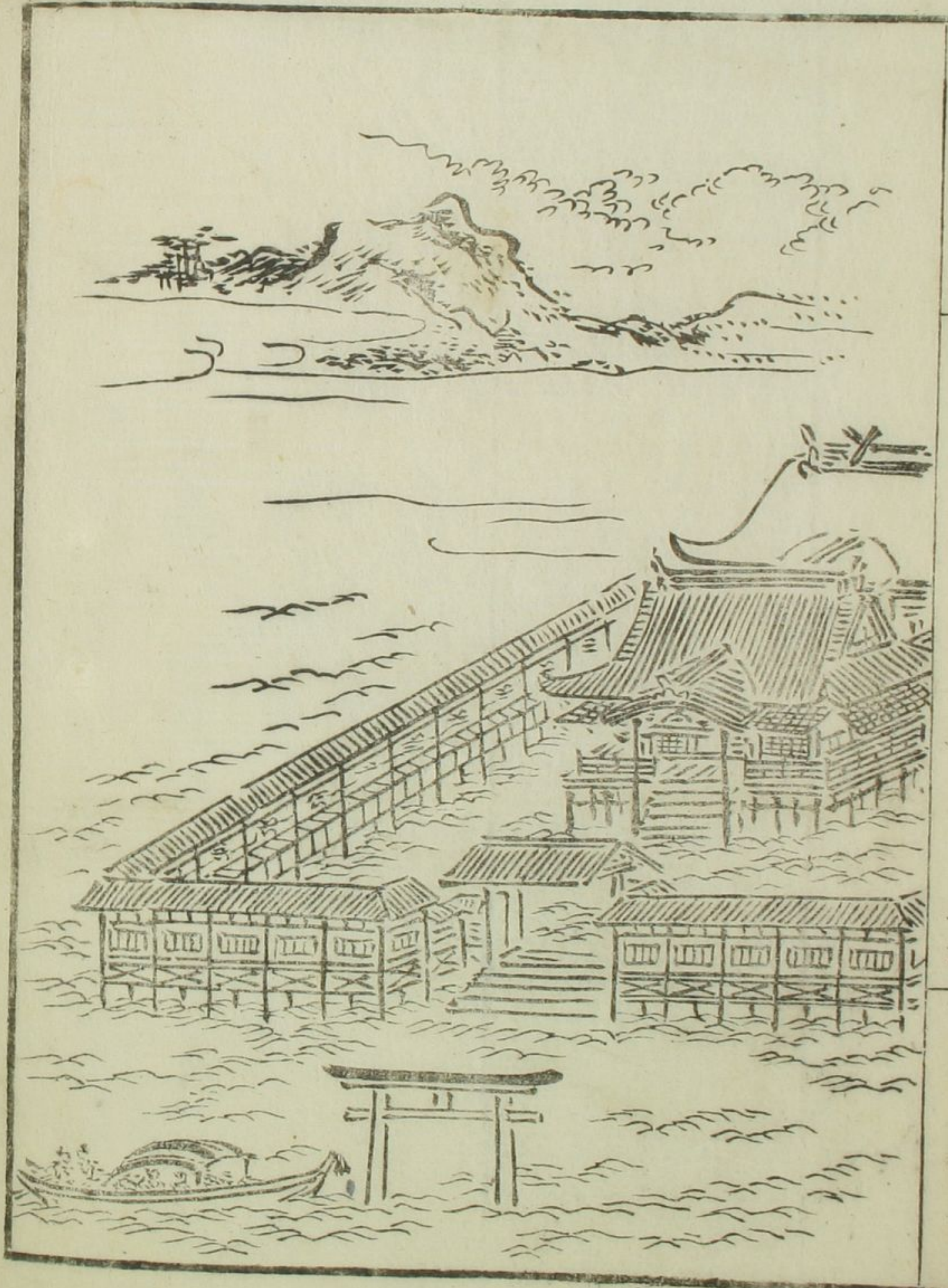
中村座

はくか子強なる

沢村宗十郎

才陰かむ人ありこいしうとあれさう
 是あさくあさくかこさう人うあさく日
 一跡さうとこいしうあさくあさく人あ
 町人うあさくあさく商人の一跡を
 かむあさくあさく

さうりけえあさくあさくあさくあさく
 釣鐘あさくあさくあさくあさく
 入あさくあさくあさくあさくあさく
 松下
 郡市
 秀巖



十九

享保十九寅年

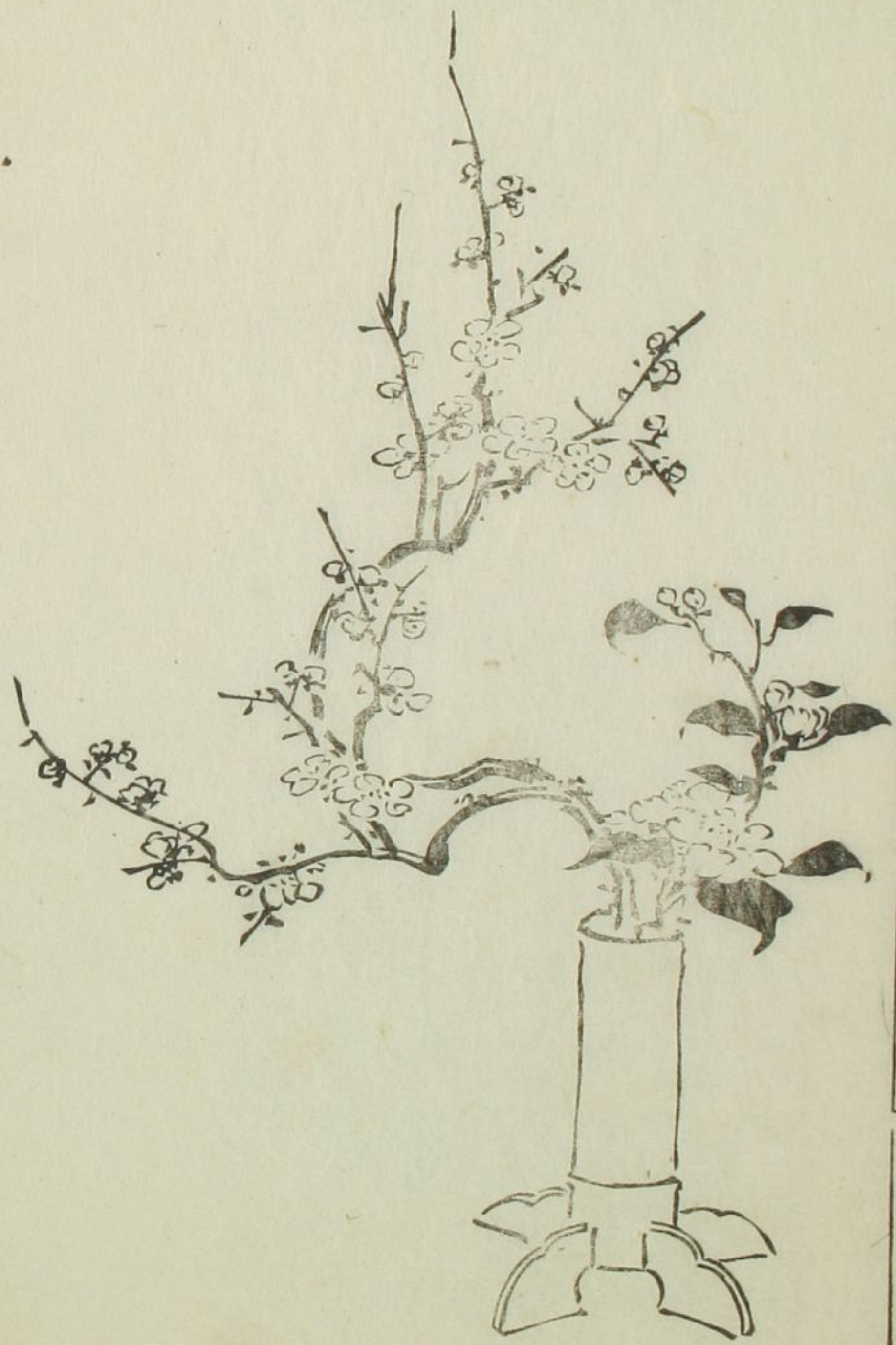
中村座

沢村宗十郎

清々々々
 とまははあ
 其手お手

あゝあゝ人々人々
 波々々々夜々々々

盛吉の御系や入日招くらん
 肉屋より魚人志のむ杜母
 奥山
 巨撰



廿二

享保二十九年

大坂 余太郎屋

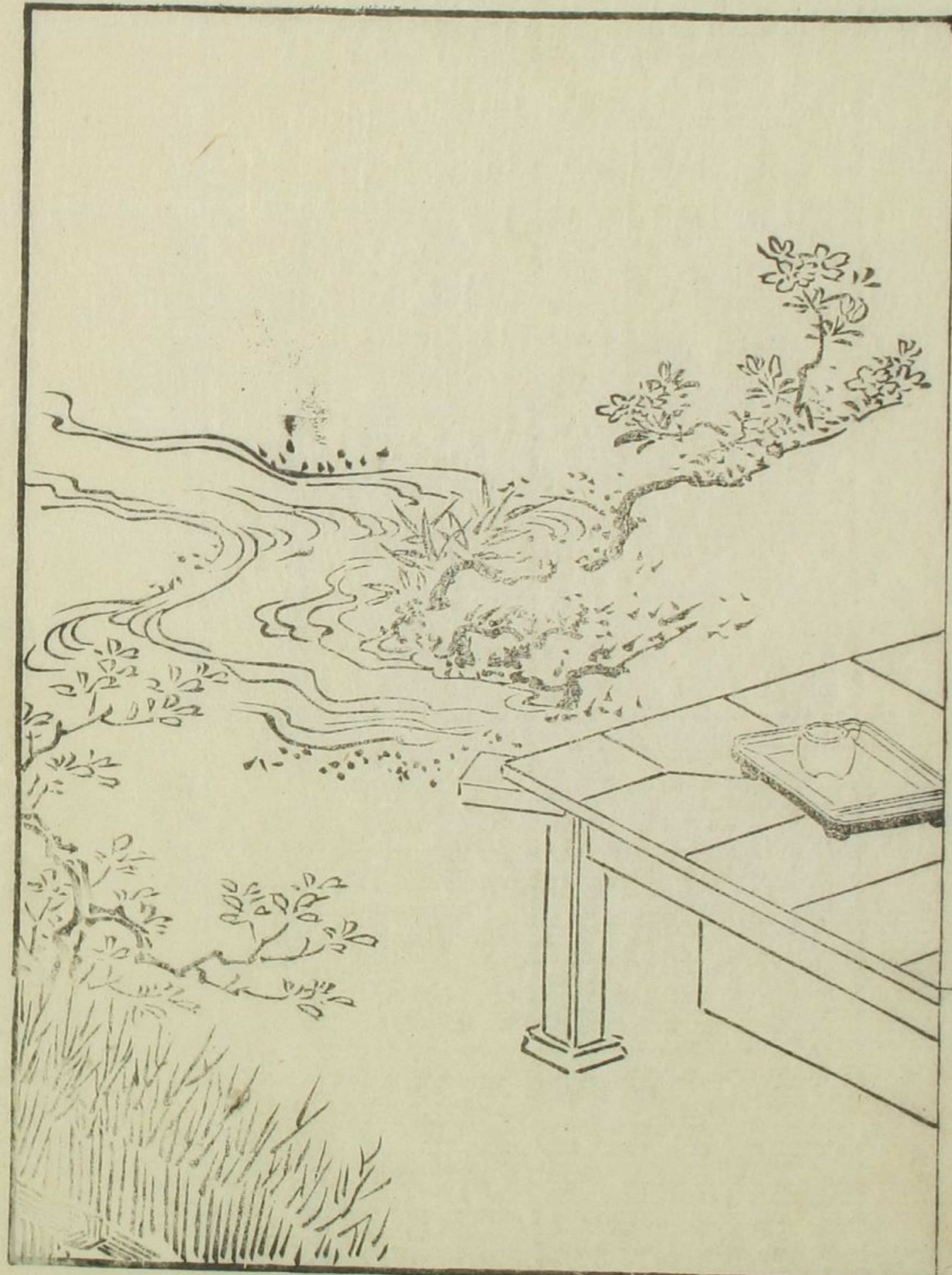
望田家后民下太郎 沢村宗十郎

願城介山丹を文出以そら師の
 去十郎も叶りさる侍うち元祖後十郎
 元祖七之郎もそのかぬおろと
 評を告ぐる中なり

淀少子や顔足せそら 明まき

葦塘

廿二



伊豆源氏蓬萊樓

元文元辰年

市村座

木村文苑

沢村宗十郎

志村也太郎

市村竹之丞

職人集會合このころれうりハ昔より
 てもか小言くちりいゝる之古代の冠桶を
 持ゝ人ハつぎて今ハもちやるなり

又送るや赤沢山よりしきん

馬道

炉ひききも鞠も古酒めや烏帽子折

餅酒

烏帽子やを江戸へ又うけの師走也

喜仙



今昔伴音家 元文二年

市村序

鳴の勘太馬

沢村宗十郎

喜海勘七

三条勘太郎

俱邀俠客芙蓉劍
其宿娼家桃李蹊

伊達漆の上は下は花の山 五帆
尺八の男は燈や橋をみ 蛙井
5歩も心や行をよみ伊達小袖 雅郷



元文三年

市川座

栗田口東言三丞

沢村宗十郎

ニヤ〜重盛の着履より

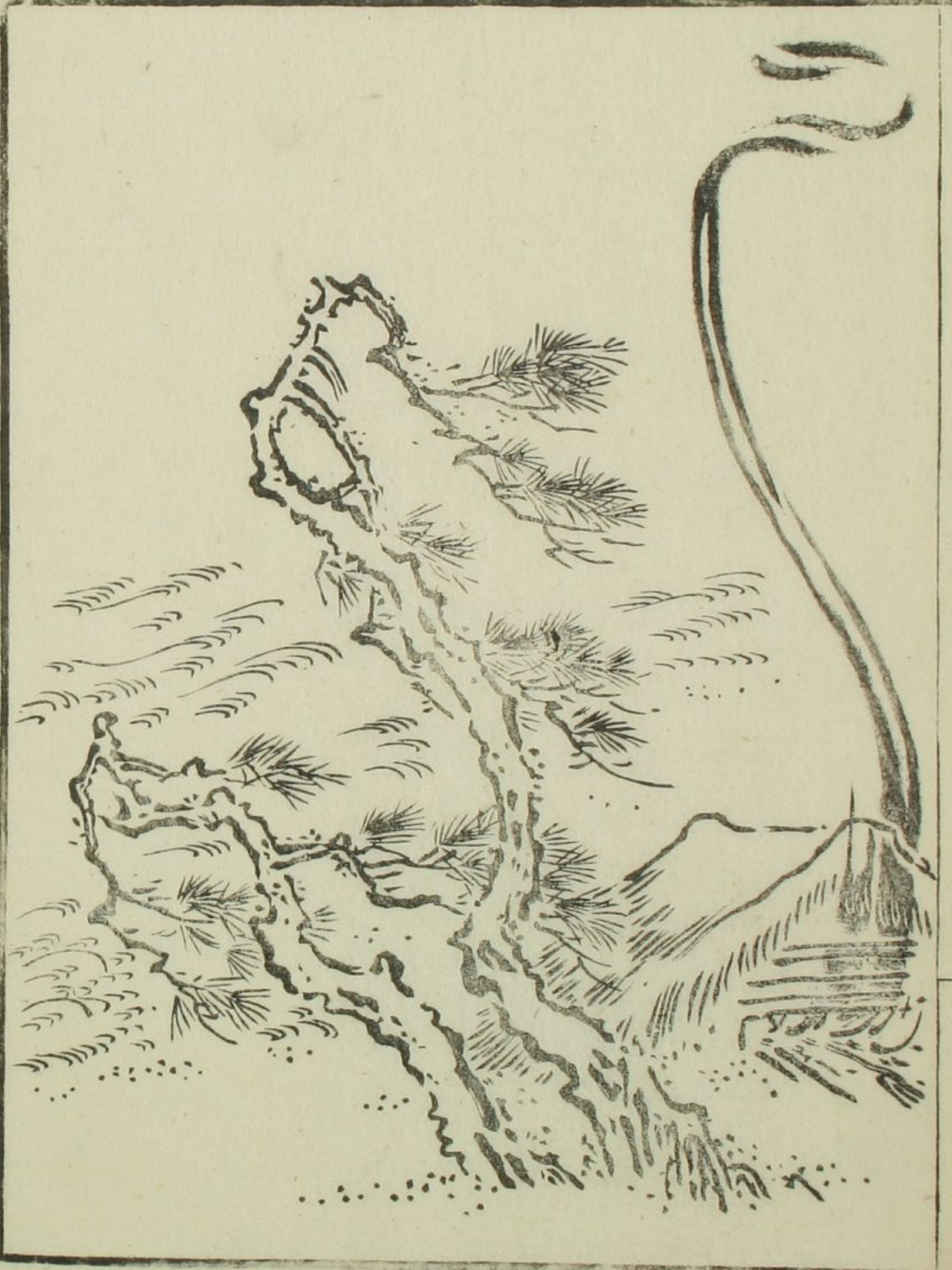
栗田口〜東言三丞の

ヤリハ部の〜しめをあらうよ

お初や 福德もまよ 刀 源治 助庵

お櫃をいもむ。あやあきし 田抄

江連や〜鶴りて海治の妻や得 素練



元文四年

中村庵

ままは浦島六氣 沢村宗十郎

すほの海人此沙焼煙り風をいひ

思ひぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

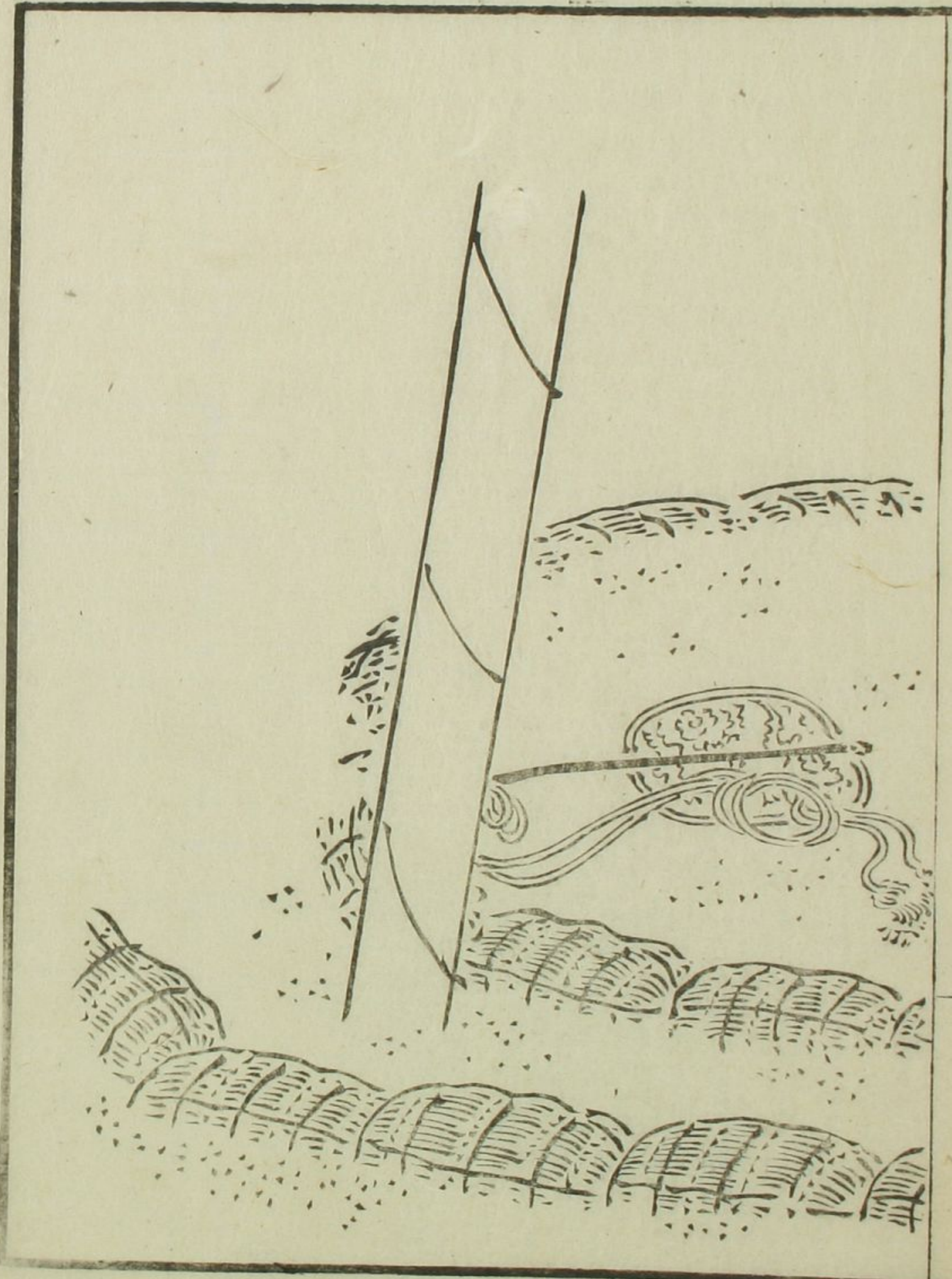
蓮池去た思ひ女御買

志るさやしまい三味線まくら

培壘や石を流るふ丸形 遊國

培壘を汐汲運る沙干の事 理同

志願を此むを語る橋の北 如牛



十五

姫籠錦曾我

元文五申年

中村庵

京の川舟 大角力 沢村宗十郎
 近江小菟太 山本京四郎

名り おお親子をくくぬ角力也 金我
 新蕎麦ふん物のあゝ角力うき 桃子
 紅梅は何おやゝ遠く本拠か好 春鴉

近江小菟太の関取丸山権左衛門丈七尺三寸余の角力
 子て蕎麦を好古人油子もはのまゝを丸く
 とはの角力を足人とさる人れかゝ一括さる
 蕎麦粉五升おせし出は五人東西へ中を
 構へくらのとは切の尻をさゝかせり

七六



十五

寛保元酉年

中むら府

くまのたいこもち

近松門左衛門

沢村宗十郎

もろりれ正徳の盃へ花袖をひくと

うらりーまのうち一申も

からー

一日を志す身につけれ雲雀うな

賀勇

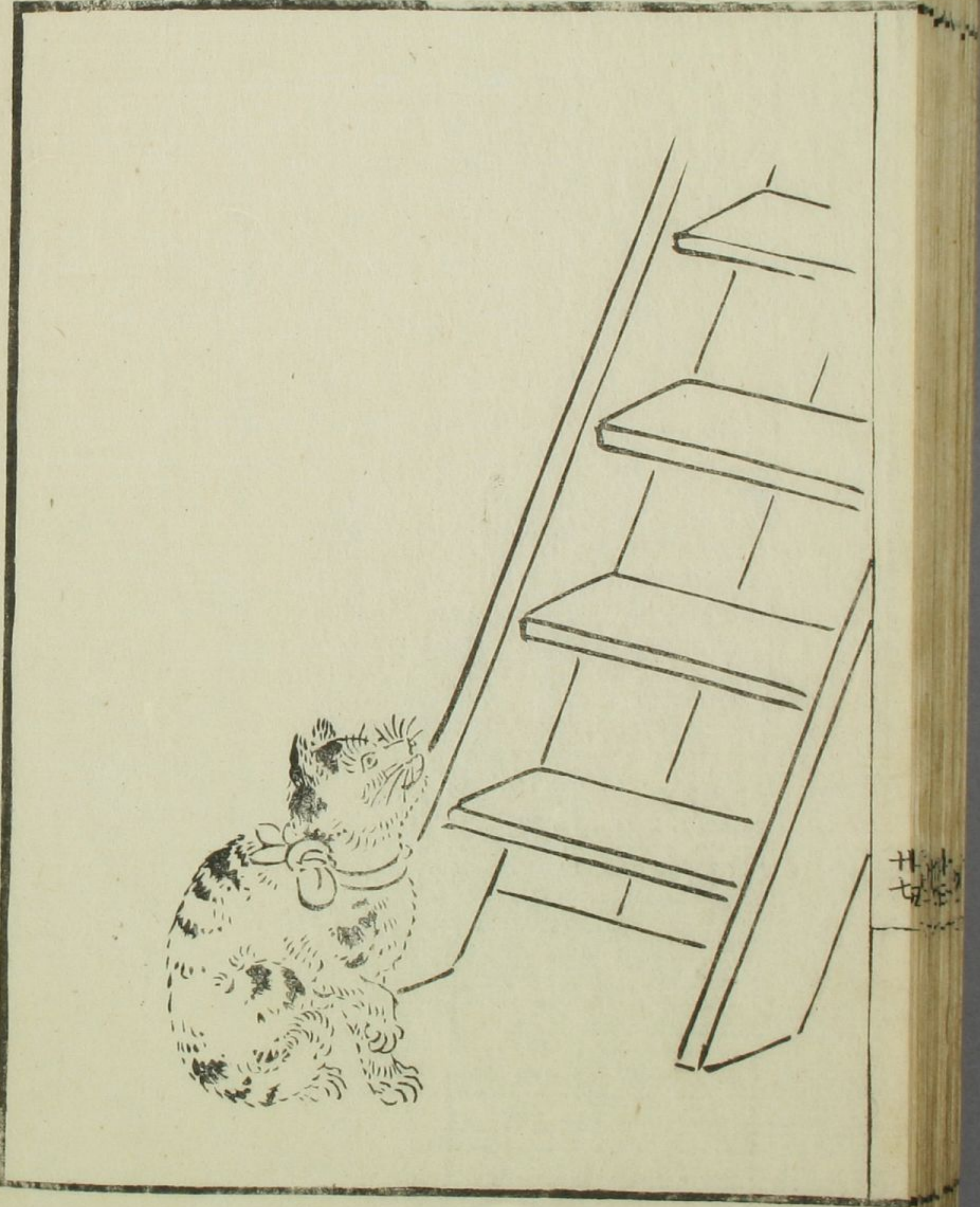
梅子来る啼きや口松子

魚樂

立居まゝかゝきりや山笑

是少

十五



廿七

男文字曾我物語 寛保二戌年 中村序

七三七系 沢村宗十郎

借九部傳表 大谷廣治

この里小伝々々夫婦あり々々々々二階を
借まり々々々々中より

夫婦のかり居り

離る小二階と下れ世帯々々 知溪
枝少々と名取の糸や二重切 雨潮

廿八

傾城赤澤山

寛保三亥年

中村府

よりとと

狭野五郎

吉田と市

沢村宗十郎

大谷廣治

佐の川市松

鎌倉を一目みたりとての山

舞鶴

春高鶴子こがの光りかち

仕切場

二山

別当乃志よあ川まゝは人数

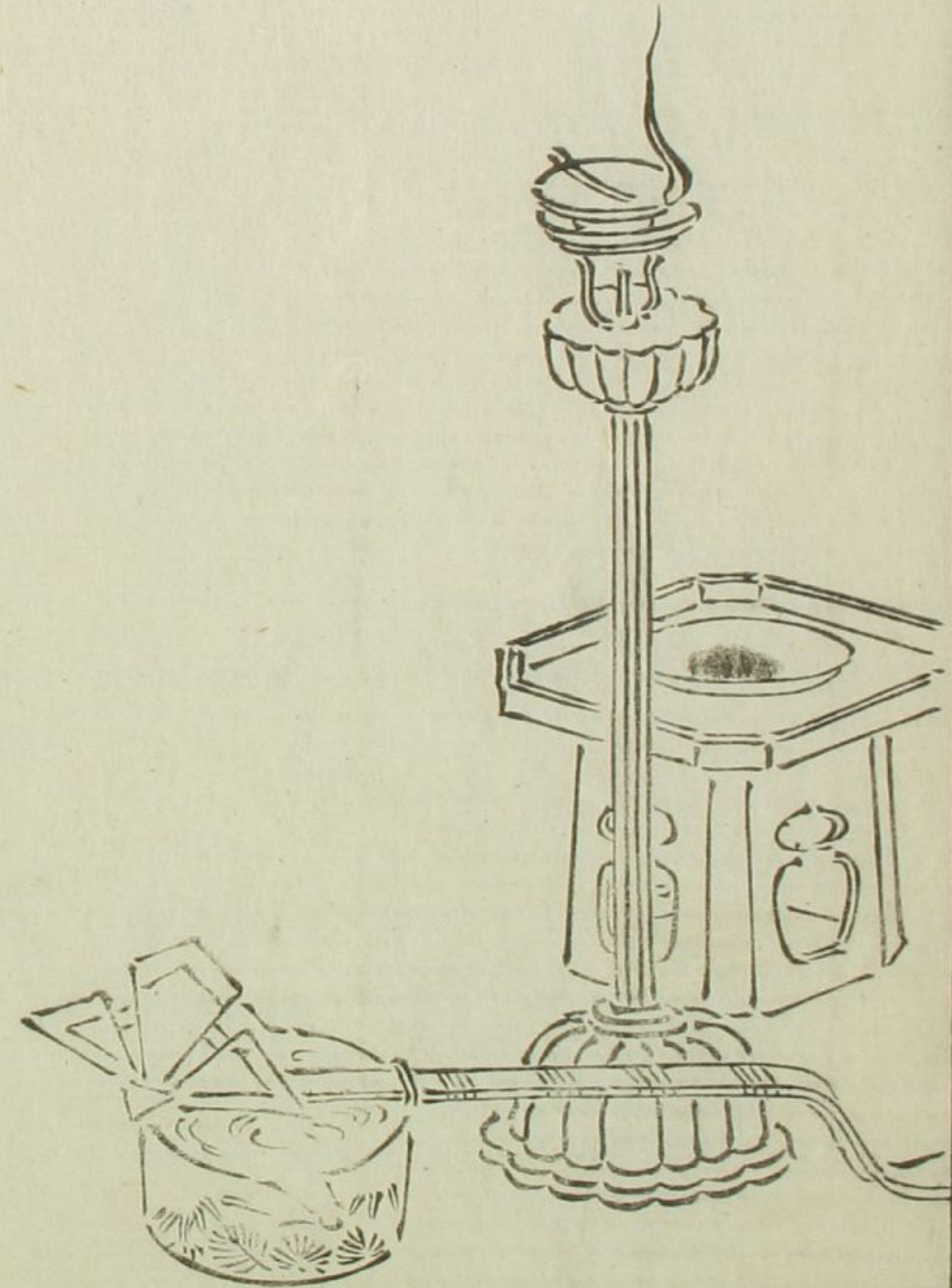
宗之

丸路中福〜さよ大と空

越治

比代ちん中毎見えは幕の幕

松源





寛保四年

大坂

中村余太郎所

紫田家臣氏下太布
万能藝女所買指南

沢村宗十郎

学文ハ似余カある時ハ文をまゐる女屋一
又昔ハ偏の存をたきくめし後詩文
奉をまゐるハ一扱女所買ハ女所不麻の法有
利外ハ利あり

既中加々紙紙の由一 女所買 龜遊

杉子蔵ちひくや庭の由一 名 栖徳

君々文讀くゆせん七用一 待價



殿造源氏十二位 延享元年 市川座

今熱坂宗彥 沢村宗十郎
神々のマツ

乃の風あり 家子荒あり 虫にぬきひと

あり 小人子欲あり 君子子仁義あり

僧了法阿り

衣巻も烏帽子似 今や里神示 中車

熱坂子似る 出立や年此布 東山

盗人より 迹より 幡乃内 和光



聞伴昔曾我物語 延享二七年 市村庵

伊藤九郎 坂東彦三郎
 吉ヶつ子 尾上菊六郎
 あげまき 中徳三浦吉郎
 助六 いきり

実芝もかゝり此うねよ花

乃よや乃よ江戸陰の妻此あ房上総 寛之
 恋凡のさきあや傘の花吹雪 志連
 瑞ふりあさきまきり 杜斗之助 女 扇舟

七十一

七十一



傾城ふらん様

延享三寅年

京都

余太郎庵

油くく一庄九所

沃村宗十所

京都に置宮宿といえ集を披落し
 舊地への歸新系二の習相云大利方の
 大くく古今此大八尺物ハ曉起年
 悪いくくくくくくくくくくくく
 評判河内くくくくくく

志里小舟や松の中は様人

菜陽

油荷のをれく新や夕暮

英獅

初見世 延享四年

中村座

川津三郎

無類の極上品と吉起を物

沢村吉十郎

朕師五郎

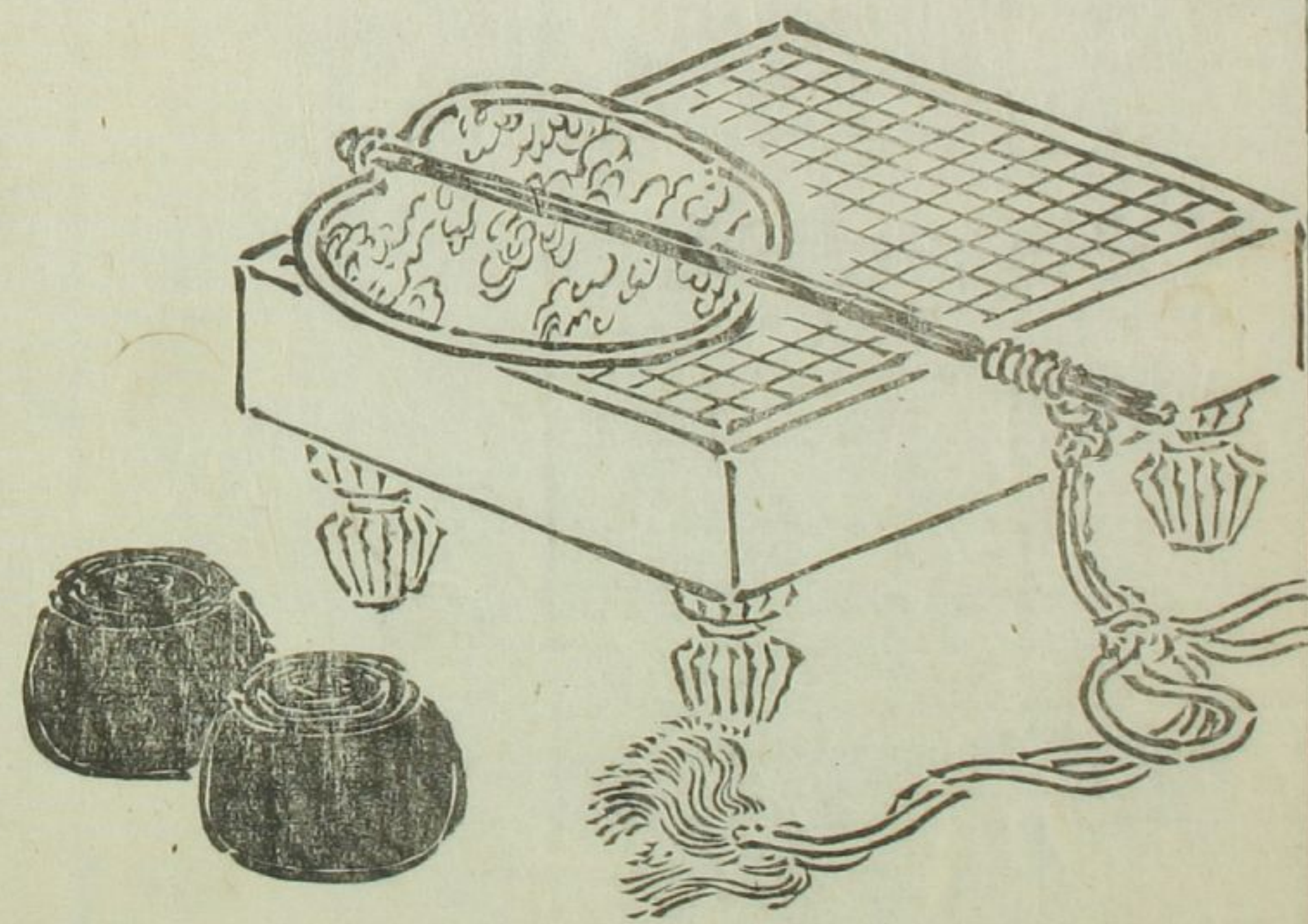
市川海老蔵

万江戸お

澁川菊之丞

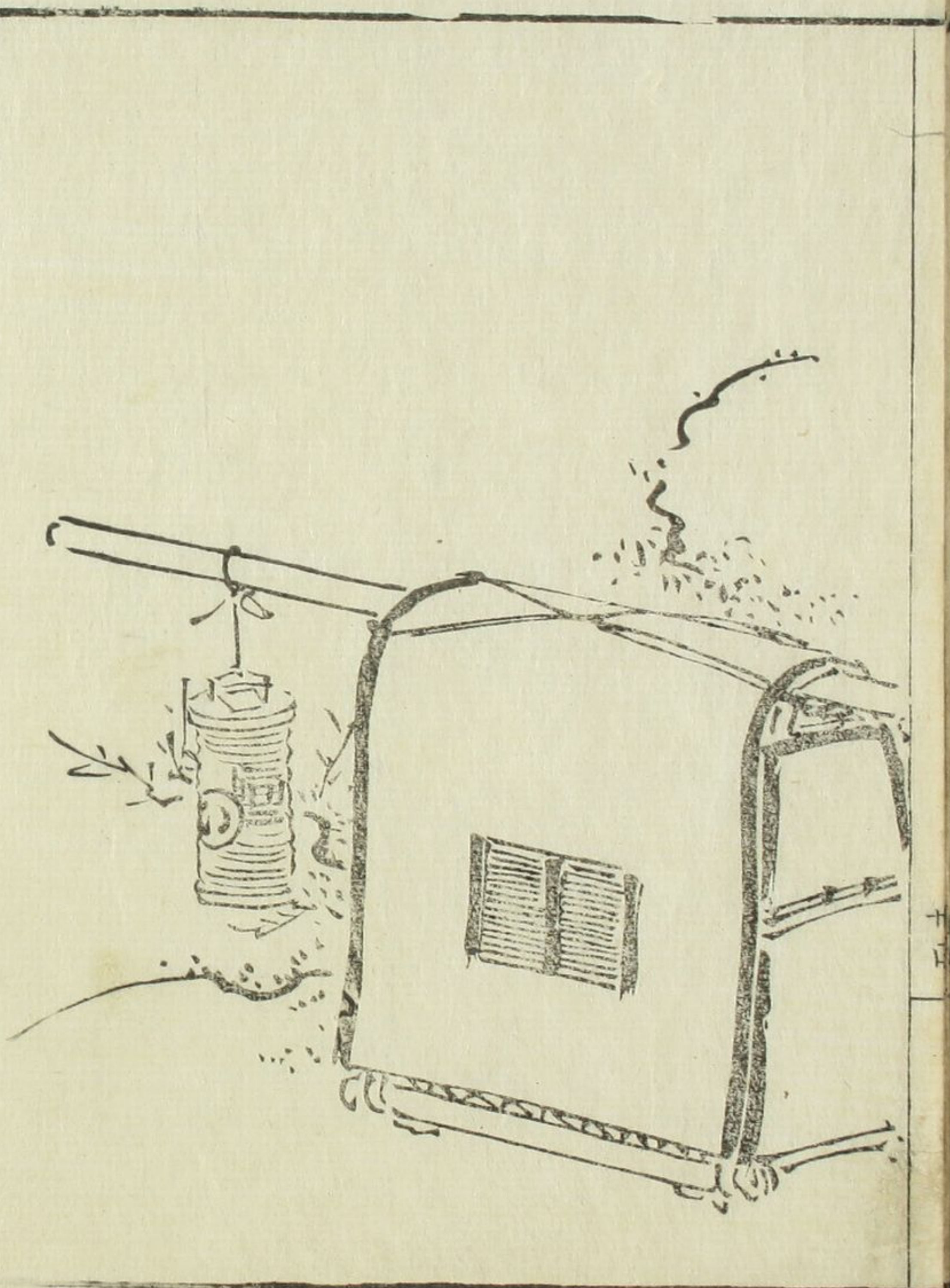
沢村吉十郎宗十郎と名改

勝ッ方一月の團扇や庭角力 赤白
 松林木よ草花錦や川津うけ 東川
 了了朕の山前角力や冬大根 女 素水



北四

北三



寛延元辰年

中村庵

加こりき惣介

沃村長十郎

駕昇 清介

市川海老蔵

舟ハ柳の一系敷一より發り車ハ推かされ
 めしをたそ造り駕ハ籠ちり

去聲の系ハ加る候と夕う那

女

文車

加る昇代淺黄路中ハ加る路中

万国

厂と乃ハ近きある處や山谷加る

為口



助六廓流家様

寛延二年

中村庄

白濁

沢村玄十郎

助六

市川海老蔵

あけまき

沢川菊次郎

おんるん平

沢村玄十郎

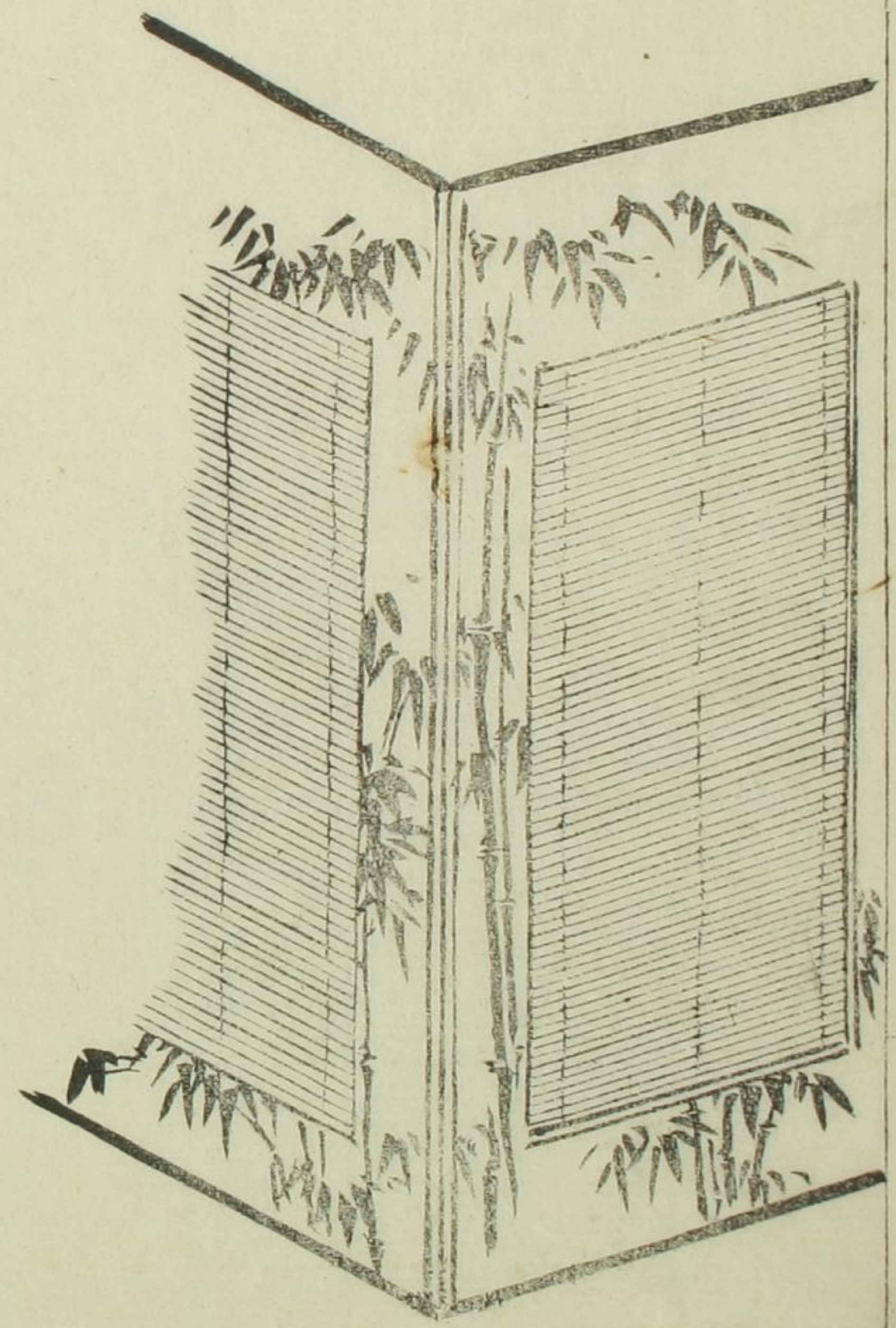
新吉原仲の町さ初
橋を極り初を立造之

上り 江戸太夫 河東
三味線 山彦 源四郎

不二寒 酒 人の角路中 菊武

茶梅 忍遠志んを命り水 其國

大石の盤れ香葉お花うり丸 秀虎



曲輪商曾我

宝曆二申年

中村座

工辰右衛門

沢村長十郎

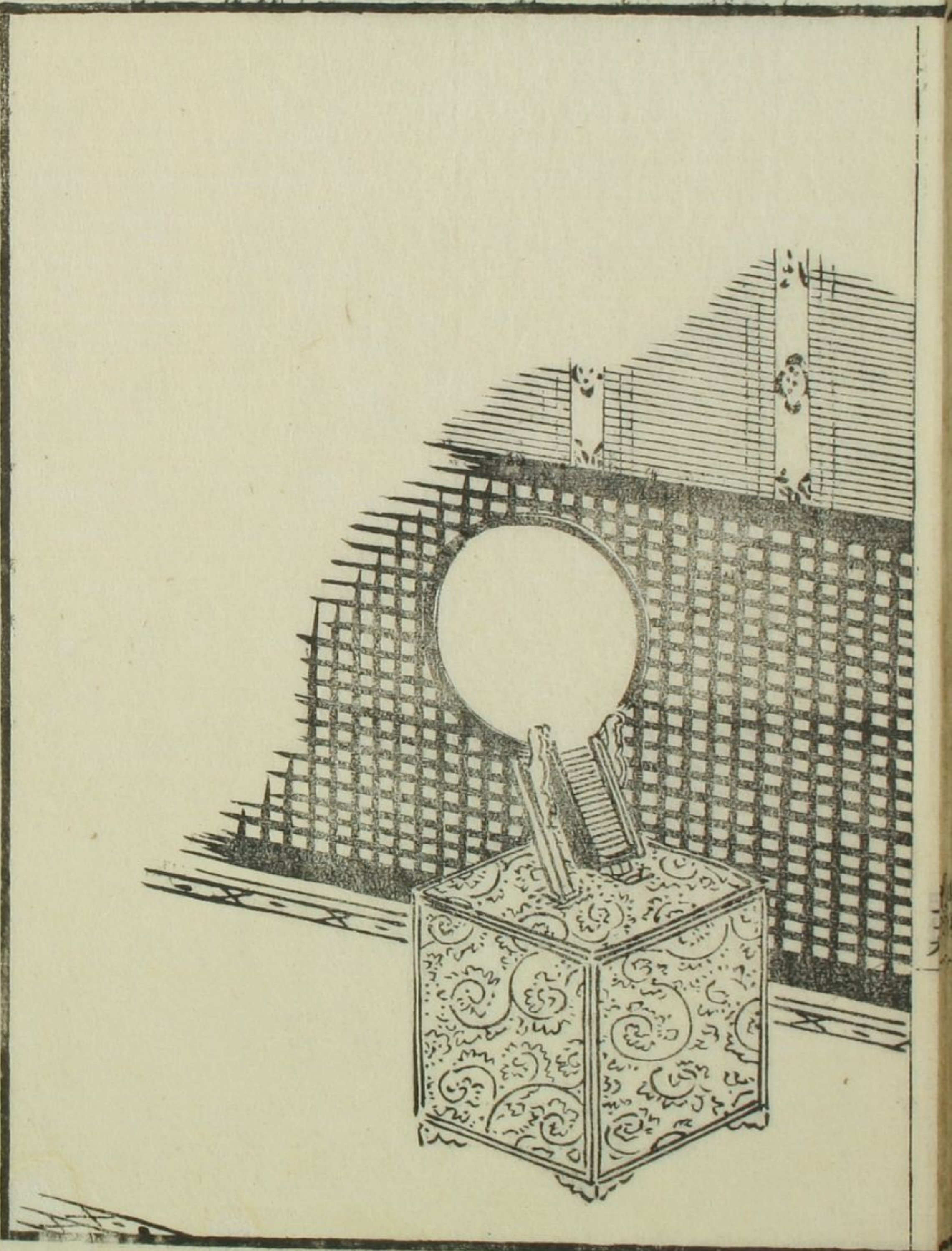
祇舞を〜 先お松よのよは〜 工辰のやさ
 れのことよ水〜 調子又風流の志れ者よ
 祇舞を福〜 よか〜 調子を唱お調子
 祇舞を〜 調子〜 調子〜
 まん不朽の語草〜 魚〜

白魚や〜 旨原

初〜 山花

学〜 寛美

三九



将門故郷錦

宝曆三酉年

赤田庵

まさかた

沢村世十郎名改

助言を言助

もせ茂翁の記ふ玄室の八幡本の花吹や娘の神
 ろく富士一翁之玄戸室に入て焼ゆふちかひのし中
 火と出見のみこと生れあひしより室れ八幡と
 ます煙りを詠智るり侍もあつて謂なり

七種やいつ道とわうぬ雪雪うか 祇道
 下那れ大裏も概り終う那 故一
 畑を焼煙も麻一 大裏あは 馬雪



去深いろは草香

宝曆四戊年

市村

大早中らる女

助言原言助

かうる

中村余共命

そらみ命

尾上菊又命

竹、霞、經、冬、雪

庭、昏、未、夕、陰

角文字や指討路中代草のら

簾至

あゝ雪の空生枝もむしり

梅磨

そらまゝ酒飲せりや幸志人

女
莖路



宝曆五年

東田在

京の次所

助言至言助

あきひる三所

工後たき門 右三ヤク

確吸三聖

二千騎此供哉拵ひて花見う那

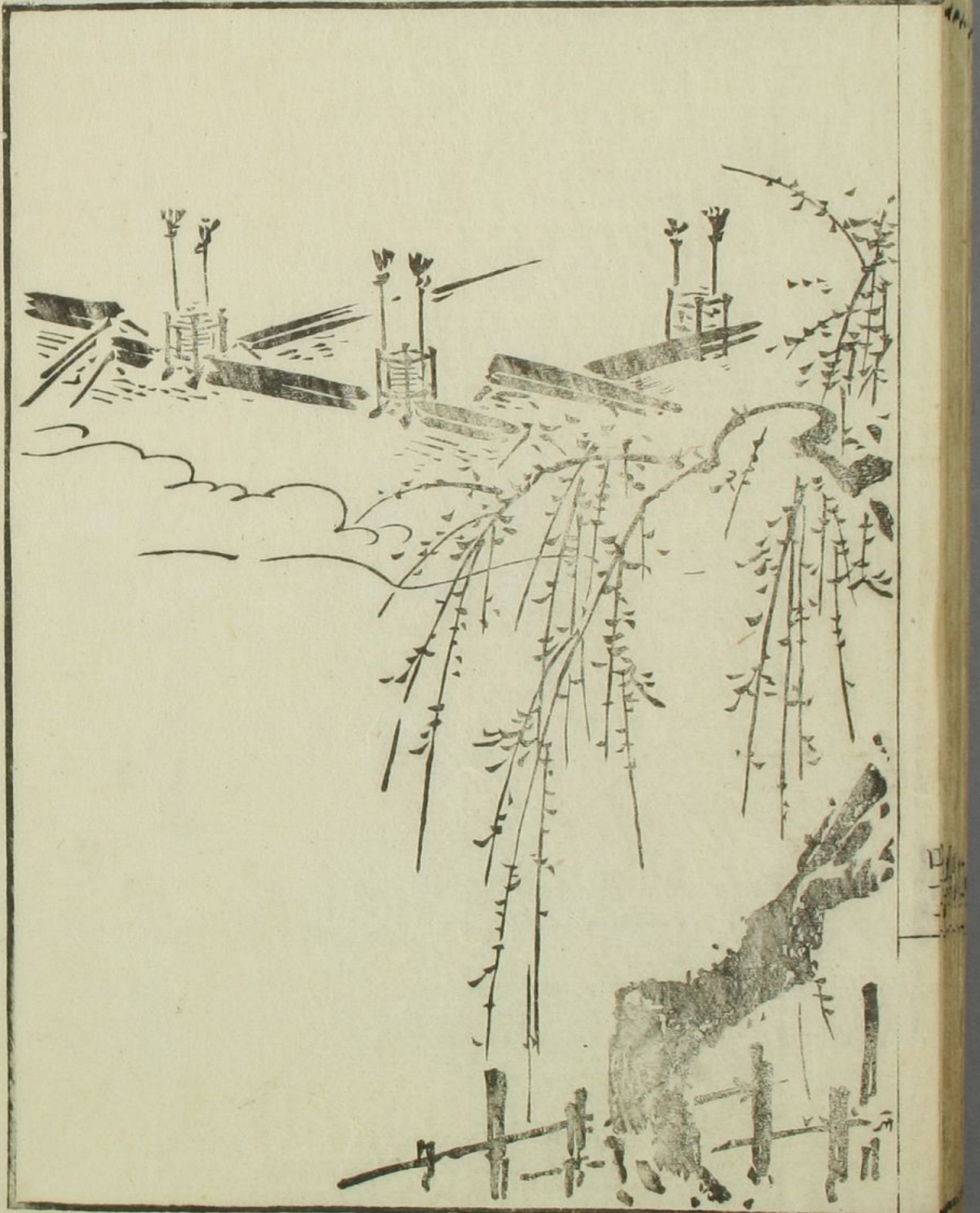
三并

梅々香小風も障々ぬ威勢うな

新車

勢の舞空々三筋乃うひうかち

金并



中村産

大星由良之介 沢村宗十郎

一とせ京都を大岸工内にて辰めを
 作し支より右長花の上よりまぢり付
 えま調子の程云る

花と実のついで巴や菱と始 文京
 風雪見お討ま目いひの字は 其碩

四十五



梅櫻仁蟬丸

布引座

小冊石丸

沢村長十郎

松王丸

松本孝四郎

梅王丸

尾上菊次郎

道風八村上帝時の本朝三跡

参議佐理大納言新成也

初年や先いの字如くせとめん

豊前

字をよやく梅子よる 春桂

齋宮

雨子於初糸きハ枝の姓も

安和

婿楠親粧鑑

よきき

松浦五郎

弾正

沢村宗十郎

萩井信三郎

中村助五郎

義貞の旧説武州川崎竹巨田新田
 大明神の宮あり又六竹のいも新田
 大明神あり是ハ義興の宮あり

花見かまほろろく路中書羽織

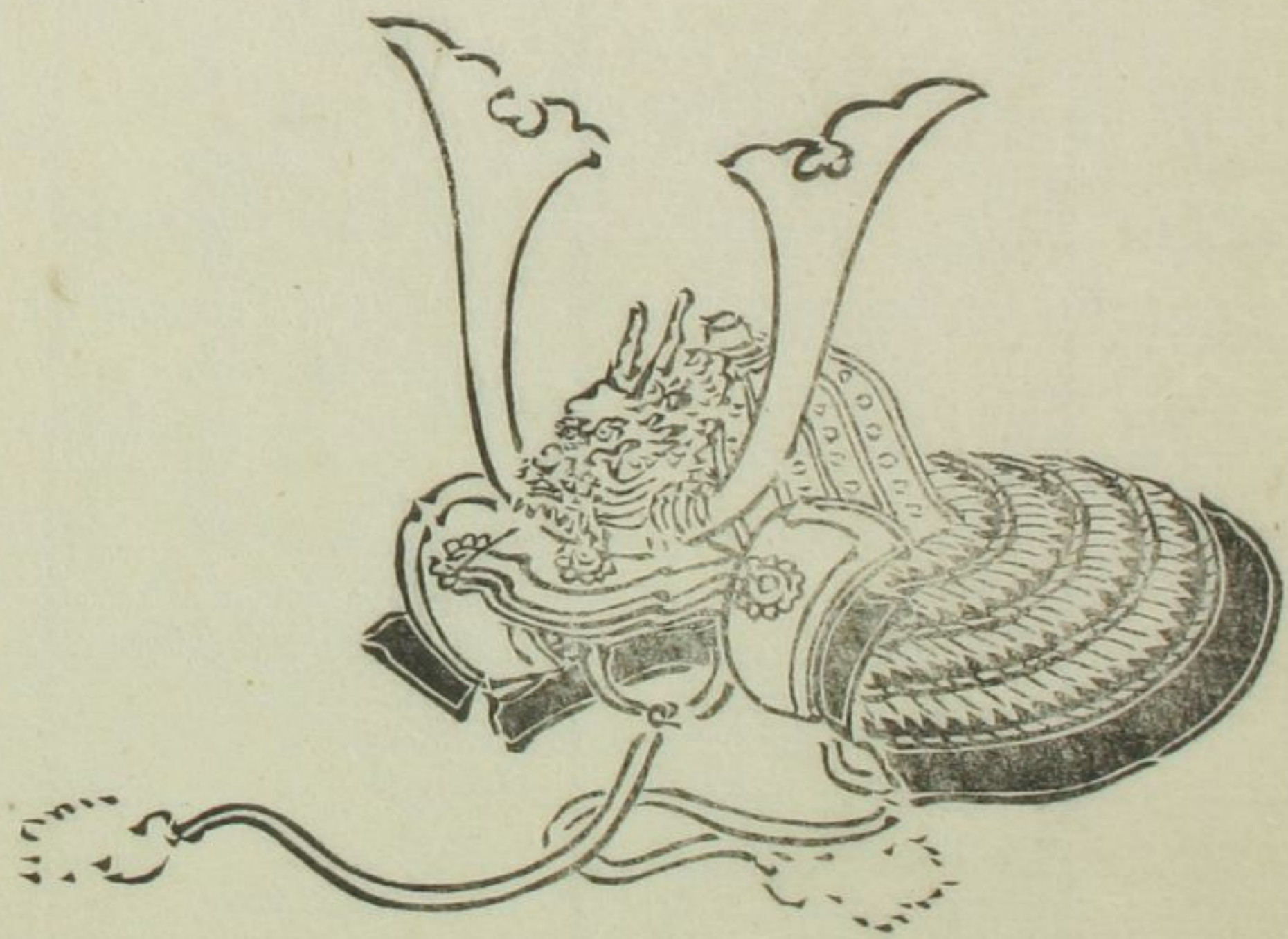
梅宇

顔足装や大中意乃評刺記

柳郊

葦よき装かまほろろく路中書羽織

山子





大橋勢首家

中村座

首家十郎

沢村宗十郎

大磯とく

山下金化

灸とく

とく

山家の三子横

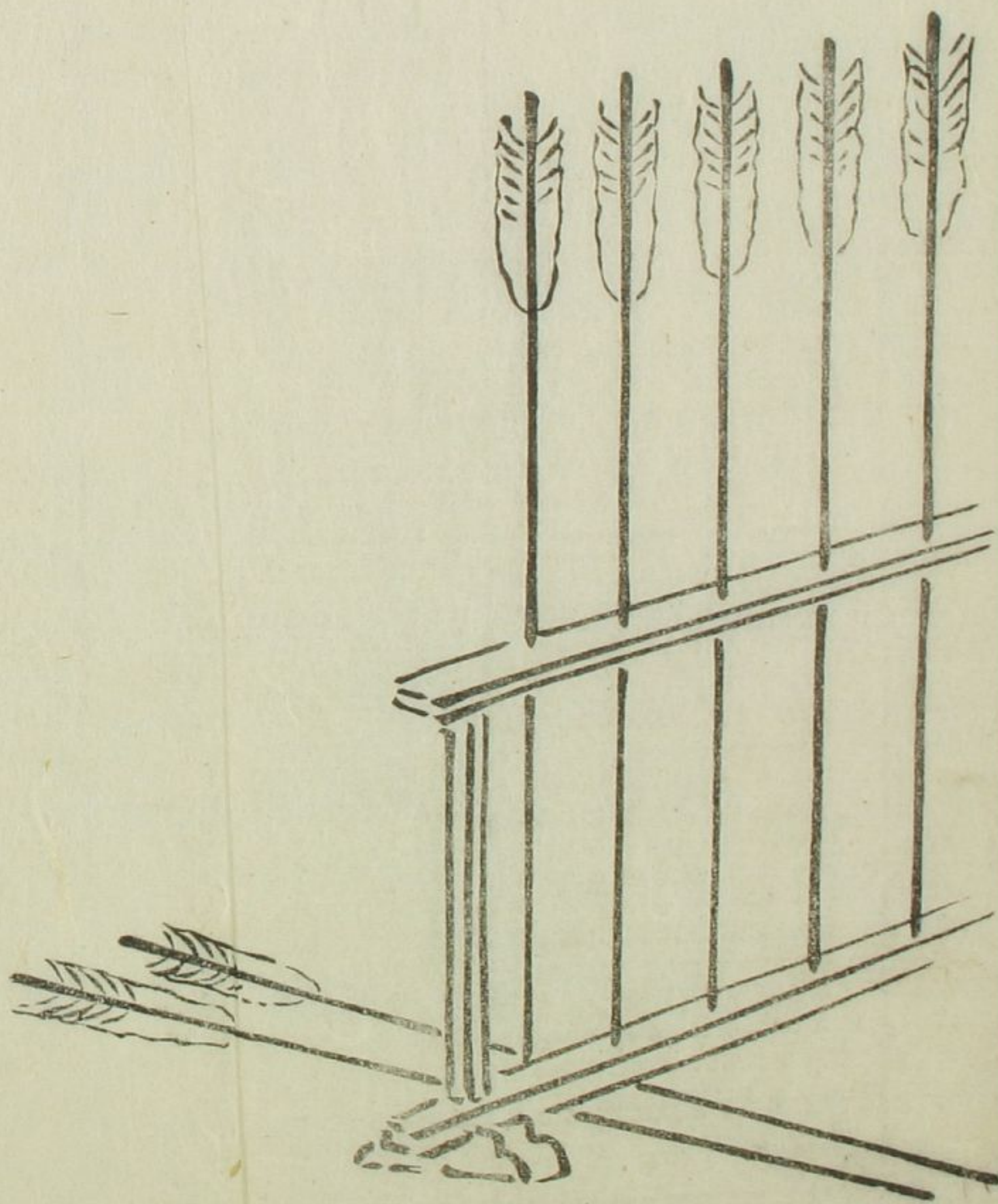
太夫 江戸河東
三浦 山家源四郎

お橋や丸玉の字は多み横

春路

きとくめ灸小能日ハ二日かた

大魚



中村府

とら十郎後の出
五郎矢の根さぎ

沢村宗十郎
市川園十郎

上り) 大薩广を搭支

三味線 梓屋 森三郎

相州言入川の上代昔我中村よむ所柄物の井あり
り川のゆよりうみ所矢の根此井と札を建より
是も芝居のさうんちるかへう

眠る蝶白ひ起せよを那 乃兄 沾流
つくとあいな物もあり 茶井江戸 可大
も多弓の砥水より川をわけたうー 塵江



市村彦

たうかけ
本名源のよりか子
沢村宗十郎

あうかけの誰いかけを磨らん
世を白く目と思ひ切り
一蝶
其角

まうけり

誰まうけり

ん免る花

秀國

享保三戌年より寶曆五亥年まで
三十八年のあひひらり初子、相立を予
中是又れあえ侍をさし年異ふ
お及混雜ハ集れしとまゝ
長きにきり

